

現高2生へ

2014年に向けての【学習アドバイス】 生物I

2015年1月実施のセンター試験から新課程での入試となり、現高2生の君達が現行課程最後の受験生となります。新課程での入試は、文系の学生が多く利用する新課程〔生物基礎〕では大きく出題範囲が変わりますし、理系の学生は現行〔生物I〕よりも相当量内容が増えた新課程〔生物〕での入試となり、負担が増えるとともに混乱も予想されます。よって、現高2生は例年の受験生以上に現役合格にこだわる必要があるのです。

現行のセンター試験は生物Iの5編がそのまま大問5題として出題され、教科書から偏りなく出題されています。よって、最初に気を配るべきは「不得意分野を作らない」ことです。

問題構成としては、知識ベースで答えるまたは考える問題が6～7割を占めますので、**まずは基本知識の欠落を無くすことが第一歩となります**。また、単純に用語や名称を答えさせることを避け、短い文章からの正誤を問う形式も多いので「文章を正確に読み解く力」を養うことも心掛けましょう。

次に**実験・観察データからの考察・計算問題は、高得点を狙うためには攻略必須のポイントになります**。受験生が初めて目にするような実験や観察例、グラフなどが利用されることも多いのですが、実は教科書や図表に掲載されているものと生物例は異なるが本質的に同じものであったり、同じ現象を異なる形式で表したものであったりすることも多いのです。よって、教科書に紹介されているようなスタンダードな実験やグラフ、図などは必ず見ておくようにしましょう。また、考察のために必要な条件やヒントが本文中や小問の文章中で提供される形のものも多いため、ここでも「**文章を読み解く力**」が大事になってきます。

センター試験へ向けての学習を進めていくうえでの留意点としては、まず生物I前半部まで（細胞、生殖と発生）では**細胞分裂をきちんと理解すること**に留意しましょう。これは体細胞分裂がきちんと理解できていないと、減数分裂が理解できず、更に生殖や遺伝までの理解が不十分となり、その弊害が大きいからです。

遺伝の問題は苦手とする受験生も多く、問題を解くのに時間も要することも多いのですが、毎年出題される分野であり避けて通ることはできません。しかしながら、センター試験の遺伝問題は教科書の演習問題レベルから大きく逸脱することのない標準的な問題が出題されてきましたので、テキストや標準問題集を使って十分量の練習を行っておけば確実な得点源に変えることもできる得難い分野です。更に遺伝問題は練習によって問題を解くのに要する時間を大きく短縮できます。試験全体の時間配分を有利に進めるためにも「**遺伝問題で時間を稼ぐ**」つもりで学習を進めてゆきましょう。

生物I後半部（環境と動物の反応、環境と植物の反応）では受容体や作動体、神経やホルモン、動植物の行動など覚えなければならない項目が多く、暗記すればそれで良しとしてしまいがちですが、この分野からもきちんと考察問題が出題されてきますので、どのように機能しているのか？どのように情報が伝わっているのか？といった点を常に意識して学習を進めてゆくよう留意しましょう。

最後に、一目瞭然というように文章で説明されても具体的にイメージできなかった事柄が、図や写真、グラフなどで見ると一目で理解できたり、記憶に残りやすいものが、特に科学の分野では数多くあります。生物の学習をするときにも図表などを併用して、文章での説明と画像情報とを相互に参照できるようにしておきましょう。

まとめ

- ◎ 不得意分野を作らないよう、早め早めの克服を心がけましょう。
- ◎ 基本知識の欠落は見つけ次第補充を心がけ、穴を減らしていきましょう。
- ◎ 教科書に載っている実験やグラフ、図などは必ず確認、理解するよう心がけましょう。
- ◎ 図表などを積極的に活用することで理解を深めましょう。
- ◎ 文章を読む習慣をつけ、読解力の向上を心がけましょう。